

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	岩井 桃子	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	<b>大学生における援助要請行動の関連要因 —利益・コストと評価懸念の視点から—</b>
------	--

本文概要
<p><b>【問題と目的】</b>近年、悩みを抱えながらも相談をしない大学生の存在が問題となっている（日本学生支援機構，2015）。一人では抱えきれない悩み直面した場合、必要に応じて適切な援助を求めることは適応上重要なことであり（永井他，2008），このように個人が援助者に援助を求める行動を援助要請行動という。相川（1989）によると、援助要請をするか否かという意思決定は、援助要請をする際に予想されるポジティブな結果（利益）と、ネガティブな結果（コスト）の査定に基づいて行われるとされている。一般に、問題や悩みを抱えた時、誰かに相談するなどの積極的な対処行動をとらない人は問題が解決しない苦痛や無力感を抱えやすく（宗像，1996），さらには問題が深刻化する可能性も想定される。そのために、援助要請行動を阻害する背景要因の影響を明らかにすることは、学生を援助に繋げるにあたって有用な知見を提供すると考えられる。そこで、本研究では大学生における援助要請行動について取り上げ、背景要因として評価懸念を想定し、利益とコストの視点から検討することを目的とする。</p> <p><b>【方法】</b>都内の私立 A 大学，私立 B 大学に在籍する大学生に無記名式質問紙調査を行った。有効回答数は 269 名（男性 87 名，女性 182 名）。①フェイスシート（性別・年齢・学年・学部・学科）②評価懸念：Short Fear of Negative Evaluation scale（以下 SFNE）（笹川他，2004）③相談行動の利益・コスト：相談行動の利益・コスト尺度改訂版（永井他，2008）④専門家への援助要請態度：心理専門職への援助要請に対する態度尺度（大畠他，2010）⑤援助要請意図（永井，2010）について回答を求めた。</p> <p><b>【結果と考察】</b>相談行動の利益・コスト尺度改訂版と、心理専門職への援助要請に対する態度尺度は探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った。その結果、相談行動の利益・コスト尺度改訂版は「コスト」「利益」の 2 因子 23 項目が得られた。心理専門職への援助要請に対する態度尺度は「専門性に対する信頼と期待」「専門家に相談することに対する恐れと抵抗」の 2 因子 21 項目が得られた。いずれの尺度も、十分な内的整合性が確認された。共分散構造分析の結果、援助を求める相手が心理専門家の場合では、「SFNE」と「コスト」、「専門家に相談することに対する恐れと抵抗」は正の関連が示された (<math>\beta = .15, .29</math>)。「専門性に対する信頼と期待」から「利益」、「援助要請意図—心理専門家」へ正の影響が示された (<math>\beta = .57, .32</math>)。「コスト」から「援助要請意図—心理専門家」へ正の関連が見られた (<math>\beta = .24</math>)。一方で、「利益」と「援助要請意図—心理専門家」の間には関連が見られなかった。援助を求める相手が友人の場合では、「SFNE」から「援助要請意図—友人」へ正の関連が見られた (<math>\beta = .15</math>)。「利益」から「援助要請意図—友人」へ正の影響が示された (<math>\beta = .56</math>)。援助を求める相手が家族の場合、「利益」から「援助要請意図—家族」へ正の影響が示された (<math>\beta = .38</math>)。以上の結果から、援助を求める相手が心理専門家の場合では、他者からの評価を恐れる心性のために、周囲や相手からの否定的な応答を予期しやすくなると考えられる。また、心理専門家への肯定的なイメージを持つことは、援助要請の際に促進要因になりうると考えられる。しかし、心理専門家とは普段かかわる機会がなく、相談するに際して具体的な利益を予期することができないために、相談に繋がりにくくなると考えられる。そのため、心理専門家への援助要請を促進するためには、相談によって得られる利益を具体的にイメージできるようにする介入が有効であると考えられる。援助を求める相手が友人や家族の場合においても、相談利益を予期できることが援助要請の促進に繋がることが示唆された。</p>